

高山の文化を高めた人々

高山の根付と 江戸で修業した彫刻師たち(2)

高山の根付は世界の根付
江黒亮一

高山の根付彫師たちのことをここまで解明した小峰大羽氏は東京の人で、日本画家・俳人・文筆家で明治四十年頃高山へ移住された。

郷土誌「飛騨史壇」を中心に種々の研究・エッセイなどを発表、山ずみ会で俳句の指導、また加藤家の「蘭亭遺稿」の編纂など高山文化の貢献者である。

高山の根付についても「亮派の刀工たち」のテーマで、始祖平田亮朝の江戸ぐらしから没年菩提寺の墓碑文まで調査解明され、この一文もそれに基づいたものである。

世界の根付

先の世界大戦で敗戦の悲惨さを知った日本。今まで隔絶されていた欧米文化が、進駐軍により堰を切って流入し交流が始まった。敗戦で何もかも欠乏のどん底に喘いでいた国内を巡って買いあさったものの中に根付があった。

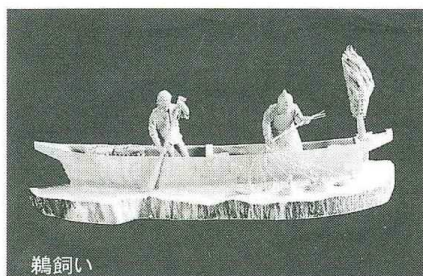
細密巧緻な彫り、しかも手ごろな美術工芸品として、進駐軍人をはじめ多くの愛好者が生まれ、根付は高く評価された。能、歌舞伎、漆などとともに、世界共通用語「NETSUKU」となった。

私の知る、レイモンド・ブツシエル氏も熱心な愛好者で、根付印籠に関する著書数冊の一冊に松田亮長と江黒尚古(亮忠)の根付が写真で紹介されている。昨年はドイツのシュツットガルトのリンデン美術館に、江黒

亮忠作「河童と蛤」の根付が展示されていると、東京の根付研究家鳩谷氏から連絡があり、高山の根付が世界的に評価されていることを知った。

先年ロサンゼルスで世界根付会議が開かれ、日本代表として高円宮夫妻が出席されたと、新聞は報じていた。しかし根付が生まれた日本では、根付という言葉は死語に近く、先年フランスのマルセイユの愛好家が知人の案内で、わが家の根付を見に来た時、通訳の学生が根付を全く知らず、まずその学生に根付の説明をしなければならなかった。

人間の手が持つ無限の創造性を忘れ、手仕事をおろそかにして、便



い飼鵜

利さだ
けを追
求する
現代、
余りに
も情な
い。手
仕事に
秀れた
生き、

作品を遺しながら、噂にもならず、知る人もなく消え去った多くの先輩職人たちのことを思い改めて追慕する。

高山市文化協会から、「高山の文化を高めた人」に、根付彫について書くことを要請され書いてみたが、果してその主旨に添えたかどうかは諸賢のご判断にお任せする。

消えた伝統工芸

平成になって消えた伝統工芸「一位細工」について附言させていた。岐阜県の木、高山の木である、一位の木で作った一位細工。あの独特のあざやかな白太を持つ艶やかな木肌、比類ない美しい木目を生かした一位細工。歴代天皇の即位式に必ず制作献上した「笏」、また、八百万神はあれども昔より一位の上になる神はなしの古歌による「雷除伝説」など歴史と伝説をもつ一位細工が、先の世界大

戦後次第に衰え、名工糠塚喜一郎氏の死去により遂に絶えた。

波千鳥や三日月透しの見台、

白太で縁取った文笏、短冊笏、

唐ひつ型煙草盆など気品ある優雅な形、市松模様たたみ込み

蓋の刻み煙草入の機能性、扇子

型箸入の大衆性など、独特の匏

を使う技を継ぐ職人も無い現在、

かつては一位細工は、一位一刀

彫をも含めた大きな存在で親し

まれたことを思えば感無量である。

もう誰も口にする者もなく、

まして記録にする者もない現在、

せめて多少のかかわりをもつ者

として惜別の言葉を添えさせて

いただく。

なお根付について、本年四月

に、日本根付研究会の大会が高

山で開催された。

職人となること

きびしき、夜なべかな

本島